（表 11：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査　-　男女別・付き合い経験や性経験における本人と相手の年齢及び、相手の数）

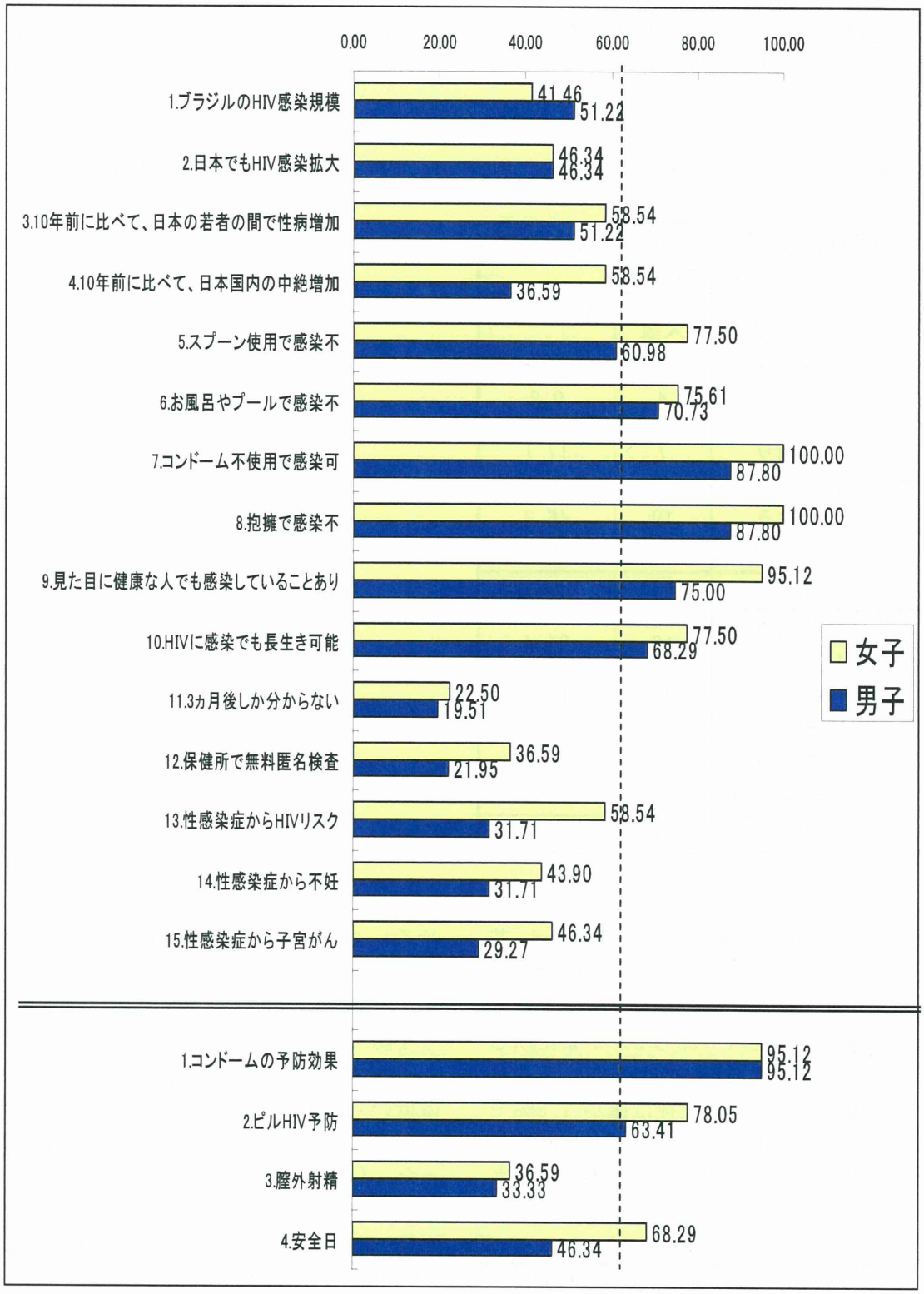
「その場限りの付き合い」					
性別		1. 最初に付き合ったときの年齢	2. 最初の相手の年齢	3. 相手の数	4. 過去6ヶ月内の相手の数
女子	平均値	11.90	13.90	4.95	1.79
	度数	21	21	21	14
	標準偏差	1.79	2.95	4.78	1.12
	中央値	11.00	14.00	3.00	1.50
男子	平均値	11.56	12.12	3.80	1.67
	度数	25	25	20	15
	標準偏差	2.123	2.698	2.783	.816
	中央値	11.00	12.00	3.00	1.00
「ステディーな付き合い」					
性別		1. 最初に付き合ったときの年齢	2. 最初の相手の年齢	3. 相手の数	4. 過去6ヶ月内の相手の数
女子	平均値	13.60	16.00	1.29	1.20
	度数	15	15	14	10
	標準偏差	1.68	3.76	.47	.42
	中央値	13.00	16.00	1.00	1.00
男子	平均値	13.64	12.73	1.58	1.17
	度数	14	15	12	6
	標準偏差	1.86	1.22	.996	.41
	中央値	14.00	13.00	1.00	1.00
「性交渉」					
性別		1. 初体験の年齢	2. 初体験相手の年齢	3. 相手の数	4. 過去6ヶ月内の相手の数
女子	平均値	14.67	17.00	2.00	1.00
	度数	3	3	3	3
	標準偏差	1.15	3.00	1.00	.00
	中央値	14.00	17.00	2.00	1.00
男子	平均値	15.33	17.33	6.00	3.33
	度数	3	3	3	3
	標準偏差	.57	.57	7.81	4.16
	中央値	15.00	17.00	2.00	2.00

「HIV・STD 関連の知識」についての項目に関しては、全体的に女子の方が情報を持っていることが分かり、特に「感染経路」、「HIV 陽性でも見た目は変わらない」や「HIV にかかっても長生きできる」などについての知識については 7 割以上、項目にっては 100%の正解率を見せて、男子でも比較的高い知識度であったが、7-8 割に留まった。

しかし、ブラジル・日本ともにおける「HIV 感染の規模」については、認知度が男女ともに 4 割程度にしかとどかず、また、「HIV 検査」関係の項目についても 2 割から 3 割強しかの認知度がないことが分かった。そして、「STD 関連」については、女子の知識度が男子より高い傾向であったが、女子で 4 割程度、男子では 3 割に留まった。

なお、「避妊方法」に関する知識については、これもやはり女子の方の認知度が高く、「ピルの避妊効果」については約 8 割が知っていた、しかし、「“安全日”を利用しての避妊効果がない」の知識については 6 割強程度であった。そして、「“膣外射精”が避妊効果がない」ということについては、男女共に低い認識度であり、3.5 割程度にしかならなかった。(表 12)

（表 12：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査　-　男女別・HIV 関連の知識度）



今、現在の年齢での「性経験」への容認に関しては「分からない」と回答した生徒を省いて、女子の間では容認しない生徒が多く約63.4%が容認しないと回答したが、男子では容認する生徒が多く、43.9%が容認すると回答した。(表13)

(表 13：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査 - 男女別・現在の年齢での性経験への容認)

今のあなたの年齢で性経験をもつことを肯定する			
性別	選択肢	人数	有効ﾊﾟｰｾﾝﾄ
女子	全くその通り	4	9.8
	その通り	7	17.1
	違う	7	17.1
	全然違う	19	46.3
	分からない	4	9.8
	合計	41	100.0
男子	全くその通り	10	24.4
	その通り	8	19.5
	違う	4	9.8
	全然違う	11	26.8
	分からない	8	19.5
	合計	41	100.0

「避妊」へのassertivenessについては「若ならい」を省いて、女子では約56.1%が「赤ちゃんが欲しくない時に避妊できる」と答えているが、、同じく「赤ちゃんがまだ欲しくなくても妊娠する可能性がある」と言う質問を否定してる女子生徒は僅か7.3%であった。男子では、「避妊できる」と回答した男子生徒は約41.5%で、「相手を妊娠させる」ことを否定した生徒は約9.7%であった。

「STD・HIV予防」に関しても、男女共に「予防できると思う」については肯定的であるが(6-8割以上)、「感染しない」確信は低いもので、最も確信が高かったのは男子でHIVに感染しないであり、約4割であった。(表14)

(表 14：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査 -性別・避妊やHIV/STD予防への意識と実現力について)

		将来、赤ちゃんがまだほしくなくても妊娠する（させる）可能性がある		将来、赤ちゃんがまだほしくないとき避妊できる	
性別	選択肢	人数	有効%	人数	有効%
女子	全くその通り	19	46.3	13	31.7

	その通り	13	31.7	10	24.4
	違う	1	2.4	6	14.6
	全然違う	2	4.9	2	4.9
	分からない	6	14.6	10	24.4
	合計	41	100.0	41	100.0
男子	全くその通り	17	41.5	12	29.3
	その通り	9	22.0	5	12.2
	違う	3	7.3	2	4.9
	全然違う	1	2.4	7	17.1
	分からない	11	26.8	15	36.6
	合計	41	100.0	41	100.0
		将来、性関係を持つ場合、STD感染する可能性があると思う		将来、性関係を持つ場合、STD予防ができると思う	
性別	選択肢	人数	有効%	人数	有効%
女子	全くその通り	4	9.8	19	46.3
	その通り	11	26.8	13	31.7
	違う	2	4.9	1	2.4
	全然違う	4	9.8		
	分からない	20	48.8	8	19.5
	合計	41	100.0	41	100.0
男子	全くその通り	5	12.2	17	41.5
	その通り	4	9.8	4	9.8
	違う	5	12.2	2	4.9
	全然違う	10	24.4	1	2.4
	分からない	17	41.5	17	41.5
	合計	41	100.0	41	100.0
		将来、性交渉でHIVに感染する可能性があると思う		将来、HIVの予防ができると思う	
性別	選択肢	人数	有効%	人数	有効%
女子	全くその通り	6	14.6	23	56.1
	その通り	10	24.4	13	31.7
	違う	1	2.4	0	0
	全然違う	6	14.6	0	0
	分からない	18	43.9	5	12.2
	合計	41	100.0	41	100.0
男子	全くその通り	5	12.5	20	50.0
	その通り	5	12.5	3	7.5
	違う	7	17.5	2	5.0
	全然違う	10	25.0	1	2.5
	分からない	13	32.5	14	35.0
	合計	40	100.0	40	100.0

「コンドーム使用」については男女共にコンドームを使いたい希望は高く、特に女子の間では「希望する」生徒は95%にのぼり、男子でも 80.5%であった。一方、「実際に使えるか」については、男女共に「実行力」は希望より低いものであった。女子では「実際に使える」と回答した生徒は約73%に下がり、男子でも70.7%に下がっている。(表15)

(表15：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査 - 男女別・コンドーム使用への意識と実現力について)

性別	選択肢	将来の性交渉時コンドーム使用の希望がある		将来の性交渉時コンドーム実際に使用できると思う	
		人数	有効%	人数	有効%
女子	全くその通り	36	90.0	24	58.5
	その通り	2	5.0	6	14.6
	違う	0	0	4	9.8
	全然違う	1	2.5	0	0
	分からない	1	2.5	7	17.1
	合計	40	100.0	41	100.0
男子	全くその通り	27	65.9	23	56.1
	その通り	6	14.6	6	14.6
	全然違う	0	0	3	7.3
	分からない	0	0	1	2.4
	分からない	8	19.5	8	19.5
	合計	41	100.0	41	100.0

「エイズ予防教育」の有無に関しては、複数回答で約 8 割が何らかの形の教育を受けていると回答した。男女共に最も多く受けた教育方法は「教科書」であり、女子では約 7 割、男子では約 6 割であった。次に多かった教育方法は「学校の研究活動」と「外部のブラジル人講師」であり、外部講師に関しては女子の役 2 割、そして、男子の約 1.5 割が講義を受けていた。(表 16)

(表 16：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査 - 男女別・HIV/STD/避妊に関する様々な教育法への暴露の有無)

この1年、エイズ、HIV、セクシュアリティー予防関連の活動に参加または活動しましたか？			
性別	選択肢 (複数回答可)	人数	%
女子	1. 教科書	29	70.7%
	. 2. 学校の研究活動	5	12.2%
	3. 日本人講師	0	.0%
	4. ブラジル人講師	8	19.5%
	5. 学校の先生	2	4.9%
	6. その他	0	.0%
	7. どれもない	7	17.1%
	合計	41	100.0%
男子	1. 教科書	24	58.5%
	2. 学校の研究活動	7	17.1%
	3. 日本人講師	1	2.4%
	4. ブラジル人講師	6	14.6%
	5. 学校の先生	5	12.2%
	6. その他	0	.0%
	7. どれもない	10	24.4%
	合計	41	100.0%

「当研究グループのパンフレット」への暴露の有無については、アンケート調査に答えた女子の45%、男子の27.5%が「パンフレットを知っている」と回答した。また、「パンフレットを知っている」と回答した生徒のうち、女子で約75%が「読んだ（＝1回読んだ＋複数回読んだ）」と回答し、男子では約77%が同じく「読んだ」と回答した。しかし、「まだ所有している」生徒は少なく、男女ともに2割程度であった。（表17）

（表17：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査 - 男女別・当研究グループ作成のパンフレットへの暴露の有無）

当研究グループのパンフレットを知っている？			
性別	選択肢	人数	有効%
女子	はい	18	45.00
	いいえ	20	50.00
	分からない	2	5.00
	合計	40	100.00
男子	はい	11	27.50
	いいえ	27	67.50
	分からない	2	5.00
	合計	40	100.00
当研究グループのパンフレットを読んだことある？			
性別	選択肢	人数	有効%
女子	1回だけ	11	55.00
	複数回	4	20.00
	いいえ	4	20.00
	分からない	1	5.00
	合計	20	100.00
男子	1回だけ	4	30.77
	複数回	6	46.15
	いいえ	3	23.08
	合計	13	100.00
当研究グループのパンフレットを所有している？			
性別	選択肢	人数	有効%
女子	家に持っている	4	20.00
	いいえ	14	70.00
	分からない	2	10.00
	合計	20	100.00
男子	学校に持っている	1	7.69
	家に持っている	2	15.38
	いいえ	9	69.23
	分からない	1	7.69
	合計	13	100.00

「当研究グループが管理している若者向けのホームページ（vidadolescente）の認知の有無について、「知っている」と答えた生徒は少なく、女子では 5%未で、男子ではさら認知度が低く、2.5%であった。（表18）

（表 18：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査 － 男女別・当研究グループ管理の若者向けのホームページへの暴露の有無）

当研究グループのサイトを知っているか			
性別	選択肢	人数	有効%
女子	はい	2	5.0
	いいえ	37	92.5
	分からない	1	2.5
	合計	40	100.0
男子	はい	1	2.4
	いいえ	39	95.1
	分からない	1	2.4
	合計	41	100.0

2.「当研究グループのパンフレット」と「HIV 関連の知識」や「コンドーム使用への認識」の関連性の分析

「当研究グループのパンフレット」への暴露の有無と「HIV 関連の知識」の度合いを調べると、女子では、パンフレットを読んだ人と、読んでない人の間での知識度の差は見れなく、項目によってはパンフレットを読んでない人のほうが知識度が高い傾向である項目もあった。しかし、男子では、パンフレットに暴露された男子グループのほうが認知度が高い傾向である項目があり、特に「ブラジルの HIV 感染の規模」、「日本の若者の間で性病が増加している」、「保健所の無料匿名の HIV 抗体検査」や「性感染症から子宮頸がんになりやすい」などの項目で、認知度が高い傾向であった。（表 19）

そして、「当研究グループのパンフレット」への暴露の有無と「コンドーム使用への認識」について調べたところ、特に男子の間で、暴露されたグループのほうがコンドーム使用への「希望」と「実施力」が高い傾向にあると見られた。（表 20）

（表 19：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査 － 男女別・パンフレットへの暴露の有無と知識度の変動について）

当研究グループのパンフレットを読んだことがある？		女子		男子	
知識項目	暴露の有無	人数	%	人数	%
1. ブラジルの HIV 感染規模	読んだ	5/15	33.3	7/10	70.0
	読まなかった	3/5	60.0	1/3	33.3
3. 10 年前に比べて、日本の若者の間で性病増加	読んだ	10/15	66.7	6/10	60.0
	読まなかった	5/5	100.0	1/3	33.3

12. 保健所で無料匿名検査	読んだ	8/15	53.2	5/10	50.0
	読まなかった	3/5	60.0	0/3	0.0
15. 性感染症から子宮がん	読んだ	8/15	53.3	6/10	60.0
	読まなかった	4/5	80.0	0/3	0.0

(表 20：ブラジル人学校を対象に介入の事前アンケート調査 - 男女別・パンフレットへの暴露の有無とコンドーム使用への意識の変動について)

コンドーム使用への意識 (全くその通り+その通り)		女子		男子	
	暴露の有無	人数	%	人数	%
将来、性関係を持った場合、コンドームを使いたいと思う	読んだ	14/14	100.0	10/10	100.0
	読まなかった	14/14	100.0	2/3	66.6
将来、性関係を持った場合、コンドームを実際に使えると思う	読んだ	12/15	80.0	7/10	70.0
	読まなかった	3/5	60.0	2/3	66.6

(3) ブラジル人学校を対象としたHIV関連予防教育における講演会

事前調査の結果および、当研究グループの過去のデータを基に構成された講演会をブラジルから招聘された若者が実施した。(図13)

講演会の参加人数：

ア) 11月24日 Santanaブラジル人学校(滋賀県)：11歳から15歳までの男女約30名(大人は不参加)

イ) 11月25日 Instituto Educare ブラジル人学校(茨城県)：14歳から17歳までの18名の男女(大人は不参加)

ウ) 11月25日 Colegio Opcao ブラジル人学校(茨城県)：2つのグループに分けて、12－14歳のグループ(16名の男女)、15－18歳のグループ(25名の男女)(低年齢グループのみに大人も参加：先生1名、保護者2名)

エ) 11月26日 Colegio Desafio ブラジル人学校(長野県)：30名の12－18歳までの男女(先生4名も参加)

オ) 11月30日 Nippaku学園 ブラジル人学校(群馬県)：14－17歳までの20名の男女(大人は不参加)

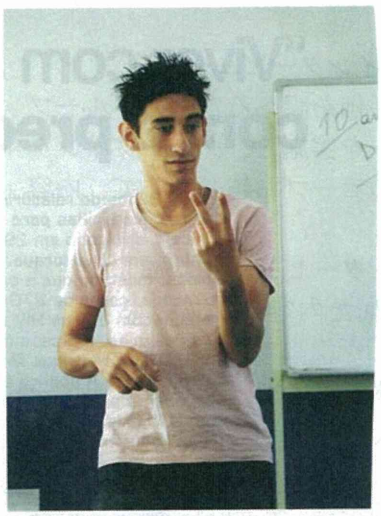
（図 13：ブラジル人学校を対象に介入講演会の風景：招聘された若者　-　ポルトガル語フリーペーパー　Alternativa　2010 年 12 月 16 日発行誌に記載）

Brasil. Lá também há muitos jovens que necessitam de informação, muitos nem sabem como pega ou não a aids.

Hoje, os jovens têm esse acesso à informação na internet, televisão...
Sim, mas muita coisa que está na internet está errada. Eles até têm o acesso à informação, sabem, mas não colocam em prática.

Você está no último ano do ensino médio. Já sabe o que quer fazer?
Direito e filosofia. Acho que direito tem tudo a ver comigo, de ajudar as pessoas, e filosofia para pensar numa forma diferente da vida.

O que sempre procura dizer aos jovens nas palestras?
O valor do jovem está muito além do que se vê, imagina e sente. Seja coerente, não seja um jovem rebelde, seja aberto à sociedade. Viver com aids é possível, com preconceito não.



HIV/Aids

Aids (後天性免疫不全症候群 - Kouten-sei Men-eki Fuzenshou Kougun): Sigla para síndrome da imunodeficiência adquirida. É uma doença que se manifesta com a infecção da pessoa pelo vírus HIV I e II. Estes destroem as células responsáveis pela defesa do nosso corpo (linfócitos) e deixam a pessoa vulnerável a inúmeras infecções e a doenças oportunistas.
Sintomas: Não é igual para todos, porém os sintomas iniciais geralmente são parecidos, comuns a outras doenças: febre persistente, dor de cabeça, dor de garganta, dor muscular, manchas na pele, gânglios ou ínguas embaixo do braço, no pescoço ou na virilha. Com a evolução da doença e o sistema imunológico enfraquecido, podem surgir as doenças oportunistas, tais como: turberculose, pneumonia, alguns tipos de câncer, candidíase, infecções do sistema nervoso (toxoplasmose, meningites, etc.).
Formas de contágio: O HIV pode ser transmitido pelo sangue, sêmen, líquido pré-ejaculatório, secreção vaginal e também pelo leite materno.
Como se prevenir: Antes de uma relação sexual (oral, vaginal, anal), converse com o seu parceiro(a) e sempre utilize o preservativo. Se teve relações sexuais sem camisinha e está preocupado, a melhor opção é fazer o teste. No centro de saúde (hokenjo) é gratuito, nas clínicas e hospitais esse exame é cobrado.
Tratamento: A aids ainda não tem cura, mas o portador do HIV, hoje, tem uma série de medicamentos que o ajudam a manter a saúde e uma vida quase normais.
Fonte: Vidadolescente, da NPO Criativos (http://www.vidadolescente.sakura.ne.jp/)

a. ブラジル人学校におけるHIV関連の予防介入（講演会）後の評価：

学校を対象に行ったHIV予防教育プログラムを評価するために、2つの方法をとり、1つ目は上記の講演会の2週間後に生徒への影響を調べるために4校にてグループインタービューを実施した。

そして、さらに講演会の約2ヵ月後にフォローアップ調査を行った。

I［グループインタービュー］

予防介入の評価を調べるためのグループインタービューを実施し、グループインタービュー録音のテープお越しをして、内容分析を行った。

グループインタービューに参加した生徒の話から得られた内容は次のとおりである：

1－講演会全体の印象：

「同じ年の人から話を聞けて、よかった」（女子15歳）

「自分の経験を話したので、飽きない話だった」（女子13歳）

「僕たちも似たような経験をしているので、聞いてよかった」（男子17歳）

「興味深かった、“現在”であるから」（男子16歳）

「話しが分かりやすかった」（女子16歳）

「彼、カッコいいから面白かった」（女子14歳）

2－講演会の話の内容で最も記憶に残っているもの：（最も多い内容順）

① 家族や両親への感謝、愛しい思い

「家族を大切に思う気持ち」（女子16歳）

「父親の話をしたとき、僕も同じ気持ちを持っているから」（男子16歳）

「両親の話し、僕も父に愛していると言えた」（男子17歳）

「両親の話し、私はいつも愛しているというけど、もう一回言った」（女子15歳）

「家族の話、大事に思わなきゃと思った」（男子16歳）

「親は本当は僕たちを愛していることに気づいた」（男子17歳）

② 予防・避妊について

「彼のモトカノたちを見せた」（女子13歳）

「自分の体を大事にしない女の子とは付き合わない」（女子15歳）

「コンドームを見せた」（男子16歳）

「コンドームは強いこと」（女子14歳）

「学校で、講演会の前に研究をした、性病について、気持ち悪い、掛かりたくない」（男子16歳）

「予防と責任感」（女子16歳）

③ 人権や偏見について

「偏見の話し、黒人やゲイに対して」（男子16歳）

「偏見が無くなった時の話し」（女子13歳）

「社会の偏見」（女子15歳）

「彼がHIV陽性者、黒人、ゲイへの偏見を持っていたけど、今はない」（女子14歳）

「偏見は無価値である」（男子15歳）

④ HIV陽性者であること

「感染しても皆と同じ」（女子13歳）

「感染しても彼女は普通に持っている」（女子14歳）

「HIVに感染しているから、彼女には言うべきだ」（女子13歳）

⑤ 欠点やよくないと思ったこと

生徒からは全くそのような意見は見られなかった。

また、生徒以外のインタービューで、参考に講演会に参加した教師にインフォーマルな聞き取りをし、次の内容であった：

教師からのプラス評価：

「子供たちと同じ目線で話した」（女性、教師兼保護者）

「言葉使いが生徒と同じなので、よかった」（女性、教師）

「生徒がこんなに夢中になって話を聞い

ているのを見たのははじめて」(女性、教師)
「同じ年齢なので、よかった」(男性、教師)
教師からのマイナス評価：
「自己中心過ぎたかも」(男性、教師)
「自分のモトカノたちの話しで終わると思った（この部分を長すぎると感じた)」(女性、教師)
「HIV 予防の話しをもっと期待していた」(男性、教師)
「時間のペース配分がまだ未熟であると感じた」(男性、教師)

II［事後アンケート調査］：現在、回収中である。(予定より遅い回収ペースであるため、今年度の報告書へのは不記載で、来年度の報告書に記載予定)

『考察』

① 当研究グループのホームページにおけるアクセス状況

ホームページの開始以来において、全体的に調べると、アクセス数が増加しているにも見られる。しかし、当研究グループがホームページの周知拡大介入を実施した時としていない時を比較し、詳しくその中身を分析すると、下記のことが判明した：

1-ブラジル国からのアクセスが非常に増加している（非介入期：524 セッション → 介入期：1,502 セッション)

2-ブラジルからのアクセスは 1 ページのみを留まっていて、内容にはたどり着いていない（セッション当たりの回覧ページ数- 非介入期:1.54 ページ → 介入期：1.17 ページ)

3-ブラジル国からのアクセスは「コンドーム」と「virgin」への言葉に敏感で、アクセス者と当ホームページの内容がマッチしていないことから、離脱率が高いと考えられる（検索ワードにおけるセッションアクセスの多い順 -「コンドームの種類」：非介入期は 300 ページビュー数 → 介入期は 685；「virgin であることについて」：非介入期は 2 ページビュー数 → 介入期は 411)

4-しかし、当研究グループは、ブラジル国への周知拡大への介入はしていないため、なぜブラジル国からのアクセスが急増しているかは不明であり、今後の分析が必要とされる。

5-日本国内からのアクセスは非介入期と介入期を比較したところ、介入期ではアクセスが減少していることが判明した（非介入期：525 セッション → 介入期：415 セッション)

6-また、日本からのアクセスにおけるセッションあたりの回覧ページ数も僅かであるが、減少気味であった（非介入期：3.70 ページ -> 介入期：3.19 ページ)

7-しかし、同じく日本からのアクセスではホームページへの平均滞在時間に関しては変更がないことから、ホームページにアクセスしている人は確実に内容を読んでいると考えられる（非介入期：2 分 43 秒 -> 介入期：2 分 43 秒)

8-日本国内の検索ワードにおける内容を調べると、非介入期と介入期の比較により、より多内容に広がり、例えば、「若者との話し合い」(非介入期：0 → 介入期：92)；「HIV 検査について」（非介入期：15 → 介入期：56)；「Gabi

のブログ　-　女性若者をつぶやきブログ」((非介入期:0　→　介入期:33)などの内容から、アクセス件数は減少していても、多義にわたるテーマにアクセスがあるため、当ホームページ目的の一部は達成さえていると考えれる

9-しかし、今後は、国境および場所を問わないインターネット環境をより有効利用して、よりアクセスの増加を目標にホームページの改正、周知拡大介入の強化、などが必要とされている。また、受動的なホームページに加えて、今後はソーシャルネットなども利用し、インターネットをより行動的な方法で利用する必要があると考えれる。

10-そして、パソコンにおけるネット接続者に限らず、携帯端末を介してのアクセス拡大を目的にホームページをより小さい画面でも読みやすいフォーマットに改正する必要であると考えれる（iPhone　-　非介入期：2　→　介入期:40:SybianOS　-　非介入期:0　→　介入期：7)

②　ブラジル人学校生徒を対象とした直接的介入

1-　介入前の調査結果において、次のことが見られた：

a. 生活パターンとしては、ブラジルと日本を行き来している状況は以前として大きな変化が見られず、約 4 割が日本とブラジルの往復を繰り返している（「以前にも日本に住んだことがある」：男女共に約 4 割)

b. 特に女子の間では、将来は「ブラジル」にて送ると言う希望が増加している（「ブラジルで大学進学が希望」:2008 年度調査は約 6 割　→　今年度の調査は約 8 割」、しかし、男子では継続的に「ブラジルで大学進学したい」と言う希望は 6 割に留まっている。

c. HIV 関連の知識については、過去の調査でも見られ、全体的に女子の知識度が男子より高いものであった（過去の研究班報告書を参照)

d. また、依然として、「避妊・STD/HIV 予防」への「希望」と「実現力への assertiveness」のギャップは大きいものであった。

e. 「性経験」の有無に関しては、2008 年度調査と 2010 年度調査を調べると、同じ年齢の男女を比較により、「性経験者群」が少ないこと判明し、これは、母集団の数及び、年齢のマッチングの差によるものでもあると考えれるが、この年代における性経験者そのもの減少を示唆する可能性も考慮する必要性がある。

従って、介入の講演会、また、ホームページ作成などでは、性経験がまだない若者をメインの対象であることを念頭にもって、「HIV 予防」に限らず、「自分や周りの他の人を大事に、責任のある性」へのテーマに重みをおいた。

（2008 年度の調査結果）

「セックス」の経験率（男女・年齢別）			
女子	13-15 歳	18.4%	(50/272)
	16-21 歳	39.2%	(85/217)
男子	13-15 歳	11.5%	(26/226)
	16-21 歳	38.1%	(74/194)

（2010 年度の調査結果）

性別	経験の有無	「性経験」	
		人数	有効%
女子	経験あり	3	7.3
	経験なし	38	92.7
	合計	41	100.0
男子	経験あり	3	7.3
	経験なし	38	92.7
	合計	41	100.0

③ ブラジル人学校生徒を対象とした直接的介入の評価

介入後のグループインタービューの内容分析から、次のような結果が得られた：

a. 生徒と教師の講演者への印象、意見は異なったことから、若者が求めている講演内容等は大人が提供したいものとは大きな差があることが明らかになった。

従って、ピアによる介入等は重要なツールであることが強調されたと考えられる。

b. 若者が求めているものは、少なくとも、印象や記憶に残るものは、HIV 予防や避妊に限る内容ではなく、今現在、実際に経験している様々な出来事やこのような出来事をどのように対処するかについてへの興味が最も大きいと示唆されたと考えられる。（「講演会で印象・記憶に残った内容」：最も多い回答が、「両親や家族の話し」）

■ 2011 年度　滞日外国人若者に対する予防介入研究

【研究の目的】

日本に住んでいるよい多くの青少年、特に、ブラジル人学校に通っている若者を対象に HIV の予防教育に関する介入とその評価を繰り返して、より浸透度の高い、かつ予防認識・態度・行動変容に繋がる教育方法を見出すことを目的とする。

【方法】

■研究デザイン：Pre and Post-test comparison group 手法を用いてブラジル人学校 4 校に対し、次の 2 つ介入方法の評価を図った：

■直接的介入：

ａ．**ワークショップ介入の評価**：２校に対しは、事前調査を行って、約 2 週間後にＨＩＶ予防に関するワークショップを実施し、ワークショップの直後に事後調査を実施した。
{Pre-test ―＞ exposure to work-shop ―＞ Post-test}

ｂ．**ホームページ介入の評価**：２校に対しは、事前調査を実施し、事前長直後に当ホームページのＰＲカードを配布し、講演会までにホームページにアクセスするように指示するよう、学校の先生に頼んだ。その 1-2 週間後に学校を訪問し、事後調査を行い、その後にワークショップを実施した。
{Pre-test ―＞ exposure to homepage ―＞ Post-test ―＞ work-shop}

【結果】

Ａ）ＨＩＶ／ＳＴＤに関する予防介入における評価

■調査方法：

対象者：ブラジル人学校４校に通っている生徒のうちの、１２歳～１８歳までの生徒（小学校６年生～高校３年生）、合計１６５人。
上記の４つの学校を対象に介入前にアンケート調査を実施し、2 つの異なった介入を行った後に、事後調査を実施した。

「介入前」の調査票は郵送にて、実施方法についての文書及び、電話にて先生に伝えたうえ、学校の教師が実施した。その後、郵送にて送り返して貰った。
介入前後に同じ内容の自記式無記名アンケート調査票を用いて、次の項目で構成した：

①「属性」
②「日本における滞在歴」
③「学歴」
④「両親との別居歴や現在の同居人」
⑤「携帯所持の有無と携帯からインターネットへのアクセスについて」
⑥「インターネットへアクセスとその接続時間」
⑦「交際経験」
⑧「性経験」
⑨「HIV・STD・避妊に関する知識」
⑩「HIV・STD 予防及び避妊に対する意識」
⑪「コンドーム使用に対する意識」
⑫**「HIV 予防関連の情報への暴露の有無」**

■**介入方法**：

a．2 校に関しては、郵送にて事前アンケート調査は実施され、実施方法などは文書及び電話にて説明した上、講師に実施を頼んだ。そして、実施後に、講師が回収し、郵送にて調査員に送り返した。

事前調査における欠落している知識項目を中心にワークショップを組み立て、事前調査の 1－2 週間後に調査員自ら学校に出向いて、ワークショップ式のＨＩＶ／ＳＴＤ関連の予防教育を実施、ワークショップの直後に、事後調査票を配布、その場で記入してもらい、回収した。その後、若者のホームページアドレスが記載されている名刺サイズのカード、および、当研究グループが 2 昨年前に作成した若者向けのパンフレットを配布した。

「ワークショップの内容」は２時間にわたって、

① QUIZ 形式で「HIV の流行規模（感染者数、感染拡大、STD 流行の拡大など)」について情報を提供し；

② 小グループに分かれ、男女の交際ストーリを作成し、その物語に添って、「HIV における予防知識」、「コンドーム使用の重要性」、「ピアグループのプレシャーなどに負けず性交渉をあせらないこと」、「HIV 予防には効果ないが、他の避妊方法の紹介」、「HIV 抗体検査における知識」、「他の STD について」、「他の STD と HIV の関連性」などについて話し合い、

③「質疑応答」を盛り込んだワークショップを実施した。

b．他の 2 校へは、事前調査記入後に、教師が調査票を回収し、その後、当研究グループ作成の若者向けのホームページのアドレスが記載されている名詞サイズのカードを配布し、さらに、ワークショップの日程までにアクセスし、中身を読むように指示するよう、文書と電話にて頼んだ。また、事前調査票は郵送にて調査員の元に戻された。

（ホームページの構成･内容については昨年の当研究班の報告書を参照。ホームページへのアクセス状況に関する分析は次のセッションに記載）

その後、調査員自ら学校を訪れ、事後アンケート調査を実施し、その場で回収した。そして、事前調査の結果を踏まえて、欠落知識項目を中心にワークショップを組み立て、事後アンケート調査実施後にワークショップを行った。ワークショップ実施後、さらに 2 作年前に当研究グループが作成した若者向けのパンフレットを配布した。

介入を実施した学校は次の通りである：

a．**ワークショップによる介入**：

静岡県浜松市所在の Escola Alcance ブラジル人学校、９名

埼玉県児玉郡所在の TS Recreação ブラジル人学校、２５名

b．**ホームページによる介入**：

三重県鈴鹿市所在の Escola Alegria de SaAer ブラジル人学校、９３名

愛知県安城市所在の Escola São Paulo ブラジル人学校、３８名

介入の評価結果：

1）介入前後の調査結果：

回収率に関しては、学校在籍の母集団は１６５名（対象年齢相当の在籍生徒数）であったが、事前調査 4 校を合わせての総回収率は約 92.7%（153/165）であり、また、事後調査の総回収率は約 82.4%（136/165）であった。

ａ．ワークショップにおける介入評価の結果：

ワークショップにおける介入参加者及び、回答者数は介入前で 29 名、そして、介入後で 21 名であった。

ワークショップによる介入を実施した 2 校の*男女比率*は介入前の集団では約男 0.9：女 1（男子 14 名、女子 15 名）、そして、介入後では男 1.3：女 1（男子 12 名、女子 9 名）であった。また、全体の*平均年齢*は約 15 歳±2 歳であった。そして、*学年*に関しては、基礎教育 8 年生から、中等教育 3 年生までで、日本の教育の中学校 2 年生から高校 3 年生までに相当する。（表Ａ１）

表Ａ１：2011 年度：講演会介入における事前調査対象者の属性 - 介入前後の比較

ワークショップ介入における事前調査対象者の属性						
	介入前			介入後		
項目	人数	%	割合	人数	%	割合
男子	14 人	48.3%	(14/29)	12 人	57.1%	(12/21)
女子	15 人	51.7%	(15/29)	9 人	42.9%	(9/21)
中 2	7 人	24.2%	(7/29)	8 人	38.1%	(8/21)
中 3	6 人	20.7%	(6/29)	4 人	19.0%	(4/21)
高 1	5 人	17.2%	(5/29)	3 人	14.3%	(3/21)
高 2	6 人	20.7%	(6/29)	2 人	9.5%	(2/21)
高 3	5 人	17.2%	(5/29)	4 人	19.0%	(4/21)

●*日本滞在期間*：日本滞在時間については、介入前後で約 4 割が「日本滞在ははじめてである」と答えて、約 3 割が「日本には以前も住んだことがある」と答えている。そして、「日本生まれでブラジルへは行ったことがない」そして「日本生まれでブラジルへは遊びのみで行ったことがある」と答えた生徒をあわせて約 2 割であった。（表Ａ２）

表Ａ２：2011 年度：ワークショップ介入前後調査における対象者の日本滞在期間 - 介入前後の比較

ワークショップ介入前後調査における対象者の日本滞在期間						
	介入前			介入後		
	人数	%	割合	人数	%	割合
日本生まれで、ブラジルへは行ったことがない	2 人	5.1%	(2/29)	2 人	9.5%	(2/21)
日本生まれで、ブラジルへは遊びにしか行っていない	4 人	13.8%	(4/29)	5 人	23.8%	(5/21)
日本は始めてである	14 人	48.3%	(14/29)	8 人	38.1%	(8/21)
日本には以前も住んだことがある	8 人	27.6%	(8/29)	6 人	28.6%	(6/21)

●*両親との生活歴*:　両親との生活歴つまり、「両親と離れて生活をしたことがあるかどうか」の質問については、約４割の生徒が「両親と離れて生活をしたことがない」と答え、「両親ともにと離れて生活をしたことがある」と答えた生徒は約 2.5 割で、「父親と離れて生活したことがある」は約 2.5 割、そして、「母親と離れて生活したことがる」と答えた生徒は約 0.5 割りであった。（表Ａ３）

表Ａ３：2011 年度：ワークショップ介入前後調査における対象者の両親との生活歴 - 介入前後の比較

ワークショップ介入前後調査における対象者の両親との生活歴						
	介入前			介入後		
	人数	%	割合	人数	%	割合
父親と離れて生活したことがある	7 人	24.1%	7/29	6 人	28.6%	6/21
母親と離れて生活したことがある	2 人	5.1%	2/29	1 人	4.8%	1/21
両親共にと離れて生活したことがある	8 人	27.6%	8/29	5 人	23.8%	5/21
両親と離れて生活したことがない	12 人	41.4%	12/29	8 人	38.1%	8/21

そして、「*現在、誰と暮らしているか*」の質問に対し、ほぼ全員が「母親」と暮らしていると答えたが、「父親」とは、約８割、そして、「姉妹･兄弟」とは約４割が一緒に暮らしていると回答した。（表Ａ４）

表Ａ４：2011 年度：ワークショップ介入前後調査における対象者の現在の同居人（複数回答） - 介入前後の比較

ワークショップ介入前後調査における対象者の現在の同居人（複数回答）						
	介入前			介入後		
	人数	%	割合	人数	%	割合
母親	27	93.1%	(27/29)	21	100.0%	(21/21)
父親	25	86.2%	(25/29)	17	80.1%	(17/21)
姉妹･兄弟	11	37.9%	(11/29)	8	38.1%	(8/21)
親戚	3	10.3%	(3/29)	2	28.6%	(2/21)
継父	2	6.9%	(2/29)	2	28.6%	(2/21)

●*インターネットアクセス*：介入前後で「インターネットにアクセスする」と回答した生徒は、介入前で約 96.6%（28/29）、そして、「インターネット使用の頻度」で「毎日」と回答した生徒は約 82.1%（23/28）であった。介入後では、それぞれ約 85.7%と約 77.8%であった。また、「一回のアクセスにどのくらい接続しているか」の質問に対し、介入前では平均的に約 3.5±3.2 時間、そして、介入後では平均に約 4.3±3.5 時間インターネットに接続していると回答した。

ちなにみ、携帯電話を持っている生徒の中で、*携帯電話におけるインターネット接続*は介入前の生徒では約 70%（14/20）、そして、介入後では約 66.7%（14/21）であった。

●***交際及び、性経験、予防行動***：介入前後で***交際及び、性経験***について、「その場限りの付き合い」、「ステディーな付き合い」そして「性経験」について、次のような結果が得られた：（表Ａ５）

表Ａ５：2011 年度：ワークショップ介入前後調査における対象者の交際・性経験 - 介入前後の比較

ワークショップ介入前後調査における対象者の交際・性経験						
	介入前			介入後		
	人数	%	割合	人数	%	割合
その場限りの使いあり	16	55.2%	(16/29)	9	42.8%	(9/21)
ｽﾃﾃﾞｨｰな付き合いあり	9	31.0%	(9/29)	6	28.6%	(6/21)
性経験あり	5	17.2%	(5/29)	3	14.3%	(3/21)
			平均	平均		
はじめての性経験の年齢			16.5±1.3 歳	16.6±1.5 歳		
はじめての性交渉のパートナーの年齢			18.1±3.1 歳	15.5±2.1 歳		

性交渉の経験が生徒における***コンドーム使用の有無***について、「最後の性交渉にてコンドームを使用した」と回答した生徒は介入前で 100%（5/5）、介入後では約 66.7%（2/3）であった。